



「親鸞聖人に関する事典の刊行」

林 智 康 (はやし ちこう)

二〇一二（平成二四）年一月十六日は親鸞聖人七百五十回大遠忌だいおんきにあたります。そのために真宗教団の各派では、大遠忌に向けて種々法要の計画が進められています。

西本願寺におきましては、大遠忌法要の期日が、二〇一一（平成二十三）年の四月・五月・六月・九月・十月・十一月のそれぞれ九日から十六日までの八日間、一日二座の計六期・四十八日・九十六座、そして平成二十四年の一月九日の速夜から十六日の日中までの八日間・十四座、合わせて七期・五十六日・百十座と決定されました。

まだ記憶に新しい蓮如上人五百回遠忌法要では、一九九八（平成十）年三月十四日から十一月十三日まで延べ十期・百日間、一日一座で営まれました。それに比べて、このたびの宗祖の大遠忌法要では、期日は約半分近くに減っていますが、一日二座修行されますから、参拝者の人数がかなり増えることが予想されます。

私自身、今から四十五年前、一九六一（昭和三十六）年に営まれた親鸞聖人七百回大遠忌法要に参拝いたしました。当時はまだ中学校三年生でしたから、法要の意義や内容についてはあまり理解していなかったと思いますが、多数の参拝者の中、大きな参拝団の旗の下に私がいたことが今も記憶に残っています。

「親鸞聖人七百五十回大遠忌宗門長期振興計画」では、その目標として二つ挙げられ、先の「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要の修行」とともに、「現代社会こたにこたえる教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる『人』の育成

かかが掲げられています。そしてそこには、十五の重点項目と二十七の推進事項を挙げ、二〇〇五（平成十七）年度から二〇一六（平成二十八）年度まで、三期十二年度にわたって実施をめざし、全体の収支計画額は二百六十億円となっています。

大遠忌法要のご縁あに遇わせていただくことも大切ですが、現代社会に相応する教学と伝道の構築と念仏者の育成が大いに望まれます。それを実現するためには、教団の構成員である僧侶・門信徒がお互いに協力し、智恵を出し合い、積極的な行動が必要です。

去る五月の下旬に、私は五人の同じ志を持つ人たちと『親鸞読み解き事典』よと（柏書房）を刊行いたしました。執筆者は真宗学を専攻する者が中心でしたが、仏教学や歴史学の人にも協力を得て、三年計画が一年延長になって四年かかって完成しました。六人が力を合わせて、ある程度親鸞聖人の全体像を描き出すことができたと思います。この事典を刊行する動機については、親鸞聖人七百五十回大遠忌をお迎えするにあたって、浄土真宗や親鸞聖人に関する研究者として私たちができることは何かを考え、まず親鸞聖人について学問水準を落とさないで、できるだけ易しく親しみのある書物を作ろうと意見が一致いたしました。一般の方にも気軽に手にとって読めるように、入門書でありガイドブックであり座右の書と願い、執筆者がそれぞれの業績を残すと同時に、それが世のため人のためになればと思いました。

これから親鸞聖人七百五十回大遠忌に向けて、各出版社を通して、多くの人たちが宗祖に関する書物を刊行されることが予測されますが、研究書とともに伝道教化に関する書物が望まれます。

ちなみに現在（平成十八年七月）流通の本をインターネットで調べてみますと、題名が「親鸞聖人」に関するものが五一七冊、「真宗」に関するものが二八〇冊、「歎異抄」に関するものが一七四冊と、合計九七一冊にのぼります。その他数多くの親鸞聖人の教えについての書物が刊行されているものと推察されます。

きた来る九月に迫った自民党総裁選に向けて「ポスト小泉」の候補者の動きが活発になってきました。小泉首相の

やすくに

靖国神社参拝問題で、中国・韓国との摩擦が続いています。また北朝鮮が七月五日にテポドン二号を含む弾道ミサイルの連続発射実験を行うなど、日米を中心として国際社会に緊張が広がっています。六カ国協議の開催や日
本人拉致事件の解決についてもまだ時間がかかりそうです。次々と難問題が生じています。これからの日本の進むべき道に暗雲が立ち込めており、今や私たち念仏者も戦争のない平和をめざした発言や行動が望まれます。

このたびの大遠忌のローガンが「世のなか安穩なれ」に決まり、仏教にご縁の少ない人にも広く伝えていく導入として、次に続く「仏法ひろまれ」という言葉をあえて割愛したとの説明には理解を示しますが、今こそ私たちは、その「仏法ひろまれ」を日々の生活の中で実現していかななくてはなりません。この言葉は宗祖が弟子の性
信房に宛てた手紙の内容にあり、『親鸞聖人御消息』第二十五通（『註釈版聖典』七八四頁）に延べられています。

ただ漠然と「世のなか安穩なれ」ではなく、「仏法」を通した「安穩」が大切なのです。また、その言葉の前に
は、往生不定の人は自分の往生を決定することが先決であって、それを思って念仏を称えるべきであり、
また往生一定（決定）の人は仏恩報謝の念仏を称え、さらに「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」と思うべきであると述べられます。

すなわち、往生決定の人と往生不決定の人の違いは信心獲得にあります。信と不信・信と疑、親鸞聖人はこの区別を強調されます。「信心正因・称名報恩」の御法義の再確認が望まれます。

(司教)